
WyvernCourier

市太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WyvernCourier

【Nコード】

N9924X

【作者名】

市太郎

【あらすじ】

特技はトラウマになるほど動物から懐かれます。
そんな主人公が落ちた穴の先は異世界の空だった。
落下していく主人公を助けたのは巨大なワイバーン。
主人公の特技にてストーリーカーと化したワイバーンと共に、主人公は
新たな世界で東奔西走する——予定。

01 私、モテるんです。（前書き）

穀史二五二氏作の『トンデモわいばん』からネタをお借りしております。

01 私、モテるんです。

生まれ落ちたその日から私はモテた。とにかく、モテた。老若男女問わずだ。

とは言っても乳幼児期の記憶は定かではないので、家族から聞いた話。

家族から幾度か話を聞いてはいたけれど、小学生へ上がる頃にはさすがに自覚した。

私はモテるのだと。

何かそういうフェロモンが出ているのではなからうか、なんて疑問を通り越して確実に出ているとしかいいようがない。

目の合う距離まで近づくと、相手は必ずストーカーと化す。

自覚が足りなかった頃はマジで怖かった。

自分より小さければまだ平気だったが、小学一年生になりたての女子が成犬の雌セントバーナードにのし掛かられペロペロではなくベロンベロンされる恐怖を想像できるだろうか。

口臭は言わずもがな、セントバーナードに滴るほど涎を塗りたくられ、泣きながら粗相したのは良い思い出である。

私のファーストキスは同性の異種族に奪われ、後にも先にも彼女以上に熱烈なキスをしてくれる同族の異性はいない。

そう、私はモテる。

人間以外に、という注釈つきで。

小学生時代はとにかく動物が恐ろしかった。

起床し窓を開ければ雀から鳩から烏と近場に住む野鳥がやってくる。

白雪姫のようにアハハウフフならまだ可愛い。勢いよく飛来してくる恐ろしさは某パニック映画を凌ぐものがあつた。

たまたま野良猫生息地帯を通れば、どこの笛吹ですかというくら

い野良猫を従えて泣きながら帰宅をし、大型犬を飼う家の前を通れば恐るべき跳躍力によって塀を飛び越えてのし掛かられ、遠足で動物園へ行けば私はスターさながらに檻の中から熱視線を向けられるのである。

中学、高校と歳を経て、さすがに自分の異常性を認めた私は動物達と上手く付き合うために色々と実験を重ねた。

結果、視線が重なる距離、もしくは視線が重なることによって彼らは私のストーカーと化することが分かった。

目がばつちりと合う距離で、互いに認識しあうと彼らは種別問わず某CMのキャッチコピーのようにまっしぐらでやってくる。

視線の合う距離でもついては来るのだが、視線が合わないと彼らは諦めて後についてこない事を学んだ。

この発見は私にとってかなり大きく、高校以降の被害は格段に減ったのである。

また、犬猫でしか分からないのだが、生まれたてで視力が乏しいと私が認識できないようなのでストーカーと化することはなかった。

おそらく、鳥類も同様と思われる。

ちなみに、この訳の分からないフェロモンは残念ながら人間には効かないようである。

実績は二十三年を向かえ未だ更新中である。非常に残念だ。

他、昆虫類にも効かない。

全ての動物と接触を果たした訳ではないので確かとは言いが、恐らく人間以外のほ乳類、鳥類、魚類に効果があると思われる。

そして――。

そして、恐竜の類にも効果があるようだ。

ただいまワタクシ、立科薫は声よ枯れるとばかりに悲鳴を上げて高い空より地上へ落下しつつ、寄って集ってきたプテラノドンもど

きの団体から熱烈にまわりつかれております。
誰か助けてーっ！！

02 私、迷子になったんです。

その日、私は直属の上司に頼まれて役所へ出かけることになった。それを聞きつけた隣のエリアにいる営業部長がついでにと用事を頼んできたのが事の発端だと思う。

昼食を済ませて午後一でまずは役所へと向かい、用を済ませた私は再び電車に乗って会社のある駅を通り過ぎた。

目的地は都内ではあるが都心から外れたローカルな駅で、改札を抜けた先にあるメイン通りはバスがぎりぎり擦れ違えるような細い通りだった。

十分ほどその通りを歩き、とある細い道を左に入っただけは良かったのだが、至るところに『この先車両の通行できません』の立て看板が目立つ辺りで私は焦りだした。

抜けられると思って進んだ先は駐車場となっている私有地であったり、自転車がやっと擦れ違えるような細道が五差路であったりと右往左往しているうちにすっかりと迷子になってしまったのである。目的地は取引先の会社で用事自体は書類を預かってくれれば良いだけという簡単な物であったが、道に迷ってしまい現在地さえも分からないという状況。

とにかく一旦メインの通りへ戻ろうと、携帯でアクセスした地図を見ながら足早に進む。

昨今、地下鉄のポスターでは『ながら歩きを止めよう』と喚起していたりするが、正直それどころではない。寧ろ構っていられるかという心境だった。

ながら歩きをしていなければこんな事にはならなかったかもしれないのにと、悔いても悔やみきれないが後の祭りである。

通り過ぎざまに電信柱の番地を確かめ、そして携帯の地図に目を落とした瞬間、私の踏み出した左足は地面に触れなかった。

よく言えば昔ながらの情緒ある町並み、悪く言えば整備が行き届

いていない裏道である。

窪みがあつたのかと焦ったが、上体は傾げど左足は一向に地面へ到着しない。

段差どころかよもや蓋の開いたマンホールにでも落ちたのか。そう思わざるを得ない。

転びそうになる誰しもうるすように、衝撃を少しでも緩和しようと咄嗟に伸ばした手が宙を搔く。

手に持っていた携帯が放物線を描いて道路に転がり滑るさまを見たのが最後、穴に落ちた私の視界は闇に覆われたのである。

自分の腕も認識できないほどの真っ暗な闇の中、次第に落ちる速度が増していくのが分かる。

あらん限りの悲鳴を上げ続け、息が切れだした頃ようやく違和感に気付いた。

いくらなんでも落ち過ぎやしないかと。

マンホールに落ちたとしてもいい加減に底へ衝突してて良いのではなからうか。

肩に掛けた鞆を抱き込み、膝を折り曲げて正に身を護ろうと体を丸めたまま、こんな状況の中で周りを見る余裕を次第に取り戻す。

実際、真っ暗なので周りはおるか自分の腕も見えない状況ではあるのだが。

そう、落下している重力は感じるにもかかわらず風を感じないのである。

まるで、超高層ビルの最上階からエレベーターで一気に一階まで下りていくような感覚といえいいのだろうか。

落下し続けてどれほどの時間が過ぎたのか、まだ数分といったところだと思ふのだが悲鳴を上げるのにも疲れた頃、ふと気付けば暗闇に目が慣れた時のように薄ぼんやりと自分の身体が見えるようになってきた。

目が慣れたのではなく、暗闇が薄れてきたようである。

上と思しき方を見上げてても落ちたはずの穴は見えず、下と思しき方を見ても出口は一向に見える気配がない。

内心、焦りと不安で一杯なのだが、いかんせん何も手立てが無い。唯一のよすがである鞆をひたすら抱き込んだまま落下に身を任せていると、やはり辺りの明るさが増しているように思えてきた。

自分の身体を見る事もできないほど真っ暗であつたのに、今では限りなく黒に近いグレーに思える。

時間が経つにつれ、やはり気のせいではなく徐々に徐々にと辺りは明るくなり、今では真っ白な世界になっている。

真っ白というか、濃霧の中にいるような感覚である。

ドライアイスの煙の中を進むように、落下する身体に靄がまとわりつき流れていく。

一体自分の身に何が起きたのか、どこへ向かうとしているのか、答えの出ない幾度目かの自問を繰り返したとき、とつじよ世界は変わった。

ボフンツと効果音でもつきそうな勢いで真っ白い濃霧の世界から吐き出されたそこは、澄み渡った清々しいほどのスカイブルー。

お尻と背中を下に落下していたため、靄の名残が飛行機雲のように薄くたなびいているのが見えた。

それまで感じることもなかった風の音、視線を転じれば遙か遠くには日の光を反射させる海、開けた土地に小さく見える固まりは建物の影だろうか、大小と大きさは様々だが点在している茶色いスぺースは農作地かもしれない。

町と思えるそれらはかなり遠くに見える。

強い風圧の中、ぎこちなく視線を落下方向へ向けてみると、でこぼこと隆起している茶色にまばらな緑——山だ。と認識した途端、顔が引き攣った。

漏れなくミンチ！

ちよっ！ まっ！ やっ！ どっ！ なっ！ パニくって言葉にならない叫びが頭の中で繰り返される。

いつそのこと気絶できたらどれほど良かったか。

迫りくる死へのカウントダウンなんて数えたくはない。

助けてくれるものなら悪魔でも良いから縋り付きたいといったそんな時、『ギャー？』とやけに間延びした声が直ぐ傍から聞こえたのである。

03 私、玩具じゃないんです。

ギョツとして声の方を見てみれば、数頭のプテラノドンもどきが悠々と風に乗りながらというか、一緒に落ちながら不思議そうな眼差しで私を見ていた。

プテラノドンのように嘴は長くない。寧ろ短い。馬程度の鼻面と
いうのだろうか。

猫や爬虫類のような縦長の瞳孔に琥珀色の虹彩、目の下まで裂けた口から覗く牙は私の腿より太そうだ。

頭の上には二本の角、えらの辺りにも角のような棘のような硬そうな突起、そのボディはこれまた硬くて丈夫そうな鱗に覆われている。

こんな顔をした動物、いや恐竜……でもなく生き物を見たことがある。映画とか、本の挿絵とか、つまりファンタジーなドラゴンによく似た顔をしているのだ。

私に並ぼうと羽ばたきを止めている翼膜はまさに映画で観るようなドラゴンのようにでいて、前足はないが後ろ足の太腿はさぞかし脚力が凄いのだろうと思わせる逞しさ。

そして尻尾の末端には逆向きの棘が付いていて、先端にはハートを逆さにしたというか槍の先を付けたような形をし、殴られたら肉を軽く抉られそうである。

尻尾の棘が生えている辺りから個体によってだが、黒ずんだ緑や紫の模様が入っていていかにも毒々しい。

以前やっていたファンタジーゲームで見たことあるような気がする。

ドラゴンとはまた違う、ワイバーンというタイプそのものだ。

慌てて視線を転じれば、計六頭のプテラノドン改めワイバーンが付き合いよく落下している。

個体のボディは茶、蒼、緑、白、銅、^{あか}黒と大変カラフルである。

その内の一頭、黒いのと至近距離でばっちり視線が重なる。あ、何か目が爛々としてきた。

そして、黒とは反対側にいた蒼いのがパカッと口を開けて素晴らしい牙を披露してくれた。

私も迷わずに口を開けた。

「ぎゃーーーーーっ!」

一口ではさすがに無理であろうが、二口、三口なら余裕でいけそう。大きな口を間近で開けられれば誰もが叫ばずにはいられないだろう。

私の叫び声に黒のワイバーンがパチクリと瞬き仲間に視線を向けた。

目配せのようなその仕草はやけに人間臭く感じたが、地面に叩きつけらるかワイバーンに噛み殺されるかという二者択一を迫られている私には気に留める余裕もない。

叫び続ける私をよそに、ワイバーン達も何やら騒ぎ始めた。

『ギャーーーー?』

『ギャアー?』

『ギユアー!』

刻一刻と地面が近づくこの状況で、けっして余裕があるわけではないのだが、彼らの鳴き声にアフレコを当てるとするならば――
|。

『聞いた? ギャーだって、ギャー。可愛くね? ギャーッ!』

『聞いた聞いた。ギャー、良いな。ギャー!』

『イエーイ! ギャーーーーッ! 俺も今度からギャー使うーッ!』

こんな具合に直ぐ傍でテンション高く鳴き合うものだから喧しいことこの上ない。

思わず両耳を塞いでいると、傍らの黒いワイバーンが急降下を始めた。

何ことかと目で追えば、かなり距離を取ったあとに今度は私に向かって上昇してきたのである。

「っ……ひいっ！」

とうとう喰われるのかときつく目を閉じたが、訪れたのは痛みではなく軽い衝撃と重力に逆らう浮遊感。

「……？ あ、あれ？」

恐る恐る目を開けると、何と黒いワイバーンの背に乗っているではないか。

もしかして、このファンタジーな生き物にも私のフェロモンは有効なのか！ 視線を巡らせ他の五頭の様子も見てみたが、喰ってやるうという意気込みは感じられない。

感じられないが、うっかり全部とバッチリ目が合ってしまった。

中でも一番大きいのが黒のワイバーンであつたが、どのワイバーンの背も私が余裕で大の字になれる大きさである。

しかし、鞍も手綱もなく、ツルツルとした鱗ではしがみつきようもない私は非常に不安定な状況であり、彼らがそんな私の心情を酌めるはずもなく、景品は私という争奪戦が始まったのである。

あ、止めて。と思う間も無く蒼いのが黒いのに体当たりをし、宙へ投げ出された私を器用に白がキャッチ——しかけたと思いきや茶色いのが白の顎を蹴り上げる。白に掴まえてもらえず落下する私を待ち構えている緑がゴールと思わせて、銅が羽^{あか}ばたいた翼膜でトスをする。

空中でバレーボールをするワイバーン達とボールになった私。

トスをやーめーてー！ 誰か止めてー！ 私のために争わないでー！ というか私を玩具にしないでー！

彼らのおかげで私はミンチとならず、大地に降り立つことができた。

地面へ下ろしてもらった途端に膝が崩れ、盛大にかましてしまったことは後に良い思い出となるだろう。

04 私、悲観したいんです。

無事、というには語弊はあるが、命を脅かされることなく大地に立ち、余裕を取り戻した私は改めて周りを見渡し絶望した。

なぜにワイバーン達があの場合にいたのかといえば、私が落ちた辺りはどうやらワイバーンの生息地の上空だったらしく、取り囲んでいるワイバーン達の他にもカラフルなワイバーンが空を飛んでいた、自前の巣穴に出入りしていたりするのが見えた。

小さい個体でもそのボディの幅は二メートルはありそうだし、羽を広げれば軽く見積もっても六メートルくらいはいきそうである。

全長に関しては、地に佇んでいても私の倍はあるから、ウィトルウィウスの人体図のように考えれば地面と接触する辺りを臍として頭のとっぺんまで三メートル越え、その倍で尻尾の途中までは七、八メートル、プラス尻尾の先まで入れてザッと十メートル。

ワイバーン相手に人体図が通用するとは思わないが、だいたい物の大きさを目測する基本にしているだけなので本当にアバウトな大きさである。

コンクリビルの一階は凡そ三メートル強、中層ならば三・五メートルといったところだから、小さい個体でも尻尾までの長さで三階ほどの高さというわけだ。

争奪戦ウィナーとなった黒は他の個体よりも一回り大きいので適当に十五メートルくらいと予想しておく。

ビル四階建てってところだ。うむ、実に大きい。

そんな巨体な連中の生息地なので、山一つに付き六頭前後という住宅事情らしい。

山の中腹以上が譲れない条件らしく、垣間見えた麓に巣は見あたらなかった。

山の高さにもよるがだいたい二層タイプで、下層には山の東西南

北に穴を掘って四頭、上の層には二頭から三頭、更に高さのある山なら頂上付近に一頭が巣穴を作って生息しているようである。

黒のワイバーンは連なる山の中でも特に高い部分に巣穴を設けているようで、雲が下に見えた。

つまり、酸素が薄いのではないかと思われる。高山病の症例を火急求む次第だ。私は自慢ではないが無知なのだ。

迫り出した崖が玄関に当たらしく、降り立つ、飛び立つのはこの場所らしい。

のっしのっしと進んだ先は巣穴らしき洞窟となっており、大きな窪みには岩やら倒木なんか敷き詰められている。

ふと、ペンギンの巣を思い出した。拾ってきた石を一生懸命敷き詰めて卵を暖める場所だ。

あれを十数メートルにまで拡大したような雰囲気である。

ペンギンが集める小石といった可愛らしさはない。大きい岩がゴロゴロ置かれている。

倒木もワイバーンのサイズからすれば小枝感覚なのだろうが、立派な木を薙ぎ倒して運んだ感が否めない。

折れた箇所が鋭利となっていて、危ないことこの上ないのだ。

黒のワイバーンはワツサワツサと羽ばたいて、呆然としていた私の意識を惹いてくる。

はつきり言ってギャーギャーと鳴くワイバーン語などを私が理解できるはずもないのだが、軽く胸を張って鼻息一つ吐き出すその表情は自慢そうである。

ドヤ顔しているワイバーンのアプローチを私流にアレンジして解釈してみた。

意識すれば『見て見て！ 超高層マウンテンビューなの！ パノラマ、凄いでしょ？ 高級物件なの！ 俺、強いから。これくらいのもうなんて当然なんだぜ？ 巣も見て見て？ 兵庫県産の本御影に屋久島の杉を取り入れてみたの、オシヤレでしょ？』といった具合だろうか。

実は、動物相手の垂れ流しフェロモンとは別に、動物の意向を汲み取れるという特技を合わせ持っていたりする。

ペットを飼っている飼い主ならば、食事や散歩、遊んでという催促はそこはかとなく感じ取れるだろう。

会話はさすがの私とてできないが、動物からのそういったアプローチを普通の人よりも正確に読みとれるというものだ。

以前、バウリングガルなる玩具が流行ったりもしたが、高性能なバウリングガルが内蔵されているのだと思うことにしている。

この特技を活かして動物病院にでも勤めようかとも思ったりしたが、私と出会ってしまった動物達は必ず訪れる別れに泣き叫ぶ。

誇張一切無く、泣き叫ぶ。

今生の別れのように、実際二度と会う機会は無いのだが、生木を裂かれるかのような叫びは、後ろめたいことは何一つ無いというのに罪悪感を募らせる。

抱き上げる飼い主に四本の脚を目一杯突っ張らせ、必死に顔を背けて叫ぶペットの姿を見て、飼い主さんには本当に申し訳なく罪悪感に苛まされたものだ。

とてもではないが、動物と係わる仕事は無理である。

動物に懷かれやすいの、などと人に自慢出来る領域を越えている私であるが、さすがに想像上の生き物は手に余る。

穴に落ちたときから可笑しいオカシイと思っていた。

現実から目を背け、夢なのだ、白昼夢なのだと思い込もうとしてみたところで無駄であった。

命を脅かされる危機がひとまず過ぎ去ったことで緊張が緩んだのか、今度はアイデンティティの喪失で自分を見失いそうになった。

現代社会でこれほど大きくカラフルな鳥類なんて聞いたことなどない。どう見ても鳥類とは思えないが。

日本ではない。仮に地球のどこかだとしても、もしかしたら現代でない過去の、白亜紀かもしれない。

得意げに見せられた岩と大木の間に見える薄汚れた白い棒は骨だ

ろうか。

素早い動きで岩陰を走るのは何の虫だろうか。

文明の欠片も無いこの場所でどうしろというのだ。

冷静に考えれば考えるほど気が触れそうになる。

思わず腹の底から叫んでいた。

「やめっ！ やめてっ！ アンタ、今そこでトイレしたでしょ！

用済んで舐めてたでしようがっ！ その舌で舐めないでっ！ 舐めんなー！ っ！」

顔を寄せて舐めようとしてくるワイバーンの鼻先を両手だけでは足りず、片足をもあげて必死に舌を出させまいと阻止する。

人が真剣に苦悩しているにもかかわらず、茂みの向こうで恍惚な顔をしていたのが横目に見えてた。

その長い首が下半身に曲げられてたのも見えた。

茂みで見えなかったとは言え、盛大な水音とその後の行動で何をしていたのかくらいは分かる。

舐めたいのっ！ 舐められて溜まるかっ！ の攻防で、まずは私が辛くも一勝を納めた。

マジで危なかった。

その後、落ち込みそうになるたびにワイバーンが慰めようとしてか舌をのばしてくるため、幸か不幸か私は自分の不孝に浸るところではなく、本当に幸か不幸なのか……自分を見失うことはなかった。

とは言え、絶望は去ったとは言い難く、人類未踏と思えるような山の頂上にいては、遅かれ早かれ死んでしまう。

ライターも無い状況で火を興す術も知らず、鞆にあるのはペットボトル一本の水、携帯栄養食、飴一袋と訪ねる予定であったお客様への菓子折りだけである。

生菓子でないのは幸いだ、一週間ももたない。

何とかして文明のある場所へ行かないと———そういえば、空から落ちていた時、建物というか集落よりももう少し大きい規模、町のようなものが見えた気がする。

遠くだったからはつきりは見えなかったが、家を建てる技術があるならそれなりに文明も発達していると思っただろうか。

この際、高床式な建築技術でも構わない。

衣食住の確保をしなければのたれ死んでしまう。

05 私、案外肝が据わっているようです。

動物の多くが伴侶となる相手に何かしらアプローチをする。物を贈ったり、求愛ダンスを披露してみたりと様々であるが、どこも知れぬこの世界でも求愛活動の基本は同じようである。

黒は好条件らしい住宅を得意げに見せてくれ、銅^{あか}はのた打ち回る首無しアナコンダっぽい生き物を持ってきてくれた。獲れたて新鮮フレッシュなものだから、長い尾が未だに激しくくねっていて非常に危険である。誉めて誉めてとばかりに啜えたまま近寄らないで頂きたい。察してくれ。もがくアナコンダの尾で黒が下顎にアッパーカットを喰らって少々不機嫌である。

白いのは熊っぽいのを持ってきてくれた。身体に綺麗な穴がたくさんついているのだが、その尻尾の棘々で仕留めたのだろうか。フルスイングでもしたのだろうか。開いた穴の辺りがドドメ色に変色しているのだが、問題なく喰えるのだろうか。いや、喰う気はないのだが……いきなり解体ショーが始まった。鋭利な爪で熊の腹を搔っ捌き、取り出した内臓を差し出してくる。喰えというのか。熊の胆は確かに高級品だがそれは喰えるのか？ フレッシュな赤が徐々にどす黒くなっていくのは毒なのではなからうか。

彼らワイバーンは巨体なので、仕留める獲物もとうぜんとばかりに大型動物ばかりである。大型であろうと小型であろうと、ナイフも火ないこの状況では頂くわけにもいかないので気持ちだけ頂くということまで丁重にお断りをする。

他、蒼と茶は岩を持ってきてくれた。岩の中に色のついた石が埋まっている。宝石か何かの原石と思われる。緑は歓迎の舞を披露してくれた。

雌雄の区別は付かないのだが、プロポーズというより大好きアピールと思われる。

君達の気持ちは重々に理解したので自重して頂きたい。

しかし、かなり陽も落ちてきて辺りが夕焼け色に染まってきた。

私の手よりも大きい虫が徘徊する場所で夜を過ごすのは正直引ける。いや、過ぎたくない。かといって、山の八合目、九合目辺りに位置するこの場所から徒歩で麓へ下りる気にもならない。頂上とは言っても洞を掘る関係上、この辺りが巣としては最高地なのだろうが、人間である私には関係のないことである。駄目元で彼らへ交渉を試みた。

翼を持つ生き物なので鳥目かどうかは気にかかる。肉食である猛禽類、梟は夜に活動していることもあり、少なくとも恐竜に近いと思える彼らは鳥類とも思えないし、恐竜の類に鳥目があるのか分からないが大丈夫と思いたいところである。

体の大きさから黒いワイバーンがリーダー格と思われるので、試しに話しかけてみた。暗い夜でも飛ぶことは可能であるか？ と。

黒のワイバーンはワツサと緩く羽を広げて傍らに居た仲間に向けた。

その仕草たるや、実に人間臭く私の琴線に触れる。

『おい、聞いたかよジョージ。キティちゃんが、俺らに夜でも飛べるかってさっ！ 笑っちゃうよな！ 俺らを誰だと思ってんだよなあ？ ワイバーン様だぜ？ ワイバーン様！』

『まったくだぜ！ 俺らワイバーン様に不可能なんて無いのになっ！』

などと、ギャギャ姦しく鳴いたワイバーンどもは胸を張って私を見下ろす。鼻から吐き出された息が掛かってよろけそう。

自分でアフレコしておいてなんだがむかつく。

夜など関係なく飛べると見做す。ならば、どうか麓へ下ろして欲しいと、不平は堪えて下手に出てみる。

『なんで？』

とばかりに小首を傾げて瞬きする仕草が可愛いと思えなくもない。食べ物が無いからと伝えれば、先ほど貢がれた首のないアナコン

ダもどきと開きになった変色熊もどきをワッサと片羽を広げて促された。召し上がれません。

いくら食い意地の張った日本人とはいえ、ひ弱な現代っこに現地の食材をいきなり生とか無理である。

海外旅行の第一項目でもあげられているほどだ。まずは食材に慣れてから生だろう。

それに君達はその分厚い鱗があるから問題ないかもしれないが、高い山の上で薄着の私がどれほど辛い思いをせねばならぬのか。その辺りを無駄に懇々と説くこと数十分、手を変え品を変え言葉を換え『散歩』のフリーズで渋々とだが漸く麓へ下ろしてくれることに承諾をしてくれた。

話が分かる連中で何よりだ。

唯一のよすがとなつてしまったA4のファイルが入る大きな鞆をどうしようかとも思ったが、置いていく気にもなれないので学生のように背負うことにする。みつともないが、誰に見咎められることもないので開き直る。

地面にぺたりと長い首を伏せた黒のワイバーンへ失敬して鼻面から登り、首の付け根まで這つてなんとか落ち着く。命綱もシートベルトもないので非常に安定が悪く、身に纏ったリクルートスーツはミニでないとは言え、タイトな膝丈だから腿まで捲くりあげないといけないのが難点であるが止むを得ない。贅沢は言えない身の上である。

そんなこんなで何とか準備が整ったところで跨ったワイバーンへ声を掛けた。

落とさないようにと気遣つてか、黒いワイバーンはゆっくりと羽を広げ、逞しい脚で地を蹴り玄関口という名の崖から飛び降りる。

なぜか、茶と銅あかも続いて飛び降りてきた。肩越あかしに振り返ると、残りの三頭は食事をするにしようである。

薄闇に覆われた空に、上体を起こして眼下の景色を眺める余裕など私にあるはずもなく、太く長いワイバーンの首に伏せて必死

にしがみつく。

何せ両手両足を回しても届かない太さの首である。効果はさておき少しでも空気抵抗を減らしておきたいと思うところだろう。

風に乗り、少ない羽ばたきで緩く旋回しながら雲を抜けて大地に向かつていくが、垣間見える大地は木々に黒く覆われワイバーンが下りれるような場所が見受けられなかった。

私が穴に落ちた日は秋も真っ只中だというのに真夏日であったため薄着であった。よもや、このような事態に陥るなどとは想定しておらず、ワイバーンが気を使ってくれているとはいえ、長時間風に吹かれ続けるのは寒いのである。寒いのだよ。まじで。

地平線の向こうから微かに覗いている日の明かりも弱く、体感的には初冬と思える気温と吹き付ける風はあつという間に体温を奪っていく。

早々に麓へ到着してもらわないと、漏れなくやんごとなき下半身事情が発生してしまう。

漏れなく漏れる……いやいや、そうではなくて。などと上の空であつた視界の隅に何やら光る物が一瞬見えた。

気のせいだろうかとそちらを見るとやはり光っている。

光っている——というのは語弊だろうか。

聳え立つ木々の中、だいぶ地面に近づいてきたのかぼつりぼつり開けた土地が見えてきた。

その開けた場所の一ヶ所で雲も無いのに紫の稲妻がパシパシと横に閃光している。上下ではなく横にだ。

更には、細い蛇のような炎が地面を走っては何かに当たったかのように弾けて火の粉を散らしている。

微かに人のような小さな影が幾つか見えた。

あれは一体なんだろうか？

06 私、実際には肝が据わっていなかったようです。

およそ四〇五階くらいの高さから頻繁に閃く光の元を見下ろす。微かに覗いていた日も既に落ち、小さな月が二つ上がりだしている。って、二つ？ え？ 恒星？ 衛星？

いや、今気にするところではない。薄暗がりで顔の認識まではできないが、六人の人影と二十数名の人影が対峙して争っているようである。

一人が片腕を前に突き出すと持った杖の先から炎が走り、対抗側の一人が同じように片腕を突き出し杖の先から放った雷を炎にぶつけて散らしている。何だこのマジックショーは。

少人数側も健闘しているが、やはり人数多い方に利があるのかジワジワと押されてきている。

何がどうしてどうなっているのか。助けに入るべきなのだろうか。といっても私が行ったところで何の役にも立たないだろう。

何せ、他の連中は剣を打ち交わしているのだから。

竹刀ではなく、剣である。日本刀みたいに細長い剣ではなくて、もう少し……腕の太さくらいの幅がある剣を振るっているようである。

月の光に反射した刀身が見えた。

ここはやはり見ぬ振りをしてよそを当てるのが良いかもしれない。そう思ったときである。

それまで下で争っている連中から気付かれない程度にゆつくりと羽ばたいていた銅^{あか}がいきなり鳴きだすから思わずびびった。ビクツと竦んだ反動で危うく落ちそうになる。

『滾るぜー！ 喧嘩と花火は江戸の華よっ！ 俺もやるぜー！ ヤッてやるぜー！！』^{あか}

咄嗟に見た銅^{あか}は宙で上体を反らせ、目は興奮してなのか爛々とし、勇んだ様子で猫キック、ではなくワイバーンキックをその場で激し

くして見せ、事もあるうに争っている連中目掛けて急降下していきやがる。

こいつ馬鹿だー!!

「ちょ、ちょーっ！ 待て！ 待って！ 戻る！ 戻れーっ!!」
人間より遥かにでかいワイバーンに押し掛かれたら人間なんぞ軽くプチッといってしまう。冗談ではない。もしかしたら、衣服とご飯を提供してくれるかもしれないというのにつ！

いや、今さっき見捨てようとしたが消極的なのと積極的なのとは罪悪感と雲泥の差である。

かなざり声をあげて呼び戻そうとする私に、銅は『えゝ?』と不満そうに首を巡らせつつ、私の声に応じて仕方なさそうに急上昇する。

局地的暴風により木々が今にも倒れそうなほど撓っている。根っこがミシミシと悲鳴を上げているが辛うじて倒れるまでには至らず緊張が緩む。

下ではワイバーンの急襲に驚き、全員が上空を見上げていた。

どうしよう。いきなり団結してこちらを襲ってきたりしないだろうか。あの雷とか炎とかに当たると激しく焦げそうなんだが。

一旦は上空に戻った銅だが名残惜しいのか、連中の上でぐるぐると旋回している。

威嚇しているようにも見えるのでそばへ呼び戻そうとしたのだが、私が声を掛けるよりも早く大人数組みが慌しく逃げ去ってしまった。助けた……ことになるんだらうか。謝ったほうがいいのだらうか。困った。

目線を合わせられる距離ではないが、残った少人数組みも何やら戸惑っている様子。

近寄ってもし彼らが物騒な行動を取るにしてもワイバーンが三頭もいるのだから無闇に襲ってはこないかもしれない。それに、助けてもらってありがとう。お礼に食べ物と衣服を譲りましょう！ なんて都合のよい展開になるかもしれない。彼らにしたら追剥的かも

だが。

とりあえず、これが初めての現地人なのだから当たって砕けるである。

黒へお願いし、地上へ下りてもらった私は滑り台の要領でワイバーンの羽から下りる。

窮屈ながらも三頭が下りれるスペースへ器用に銅と茶あかも下りてきて羽を畳む。

少人数組みは片腕を上げて巻き上がる風に飛び散る砂利を避けつつ遠巻きに様子を伺っていた。

上空にいたときには気付かなかったが、数名が地面に倒れている。死んでいるのだろうか。いや、起きないのだからほぼ死んでいるのだらうけど、やはりこんな物騒な場所におりるべきではなかったかもしれない。

とはいえ、既に下りてしまった手前、ではさようならで済むはずもなく、逡巡している私に一人の剣を持つ男がゆつくりと様子を伺いつつ静かに声を掛けて近づいてきた。

イケメンよ、アナタの言葉が分からんっ！

しまった。言葉が通じないとは失念だった。どどどどうしようっ！

「あ、あのっ！」

咄嗟に日本語が口に出てしまったが、歩み寄った男も聞きなれない言葉に驚いた様子で更にゆつくりと話しかけてくる。うむ、分かりません。

「すみません。何を仰ってるのか分からないのですが……」

申し訳なく首を振ってジェスチャーで試みる。

男は背後に佇む仲間を一度振り返り顎をしゃくって見せると更に男が一人ゆつくりと近づいてきた。

互いに互いの様子を伺いながらのゆつくりとした動きである。

最初に歩み寄ってきた男もイケメンであったが、後から近づいてきたのもイケメン、更に後ろにいる連中もイケメンとイケメン尽く

し。

何と言つか、イケメン万博？ 六人だけだが。肌の色合いとか顔の造詣といえはいいのか、白人風なのが二人、黒人風、中近東風、アジア風、特亜風が各一人だ。

一番最初に私へ近づいたのが褐色の肌に黒い髪と黒い目をした中近東風の男である。良く言えば己の信念を持った、悪く言えば頑固一徹そうな面立ちに緊張からなのか厳しい表情を浮かべている。パツと見たところ、この人がリーダーっぽい。最初の一步を踏み出してくるあたりが、であるが。

ついで、顎をしゃくれ進み出てきたのは白人タイプの白い肌にプラチナよりも少し白味掛かった金髪と、暗い場所なのではつきりしないがダークブルー？ いや、紫掛かった目をしているようだ。そこはかとなく育ちの良さが顔に出てるような柔和な顔立ちに、私を驚かさないうようにと気遣っているのか、私の卑屈がそう思わせるのか、脅える子供に向けるような笑顔を浮かべている。

もう一人白人風の男もいるのだが、ヨーロッパ風に比べて鼻につかない程度の野心と自信を漲らせている美中年を勝手にアメリカン風味と決め付けてみる。同じ金髪でもヨーロッパより濃いゴージヤスな金髪で、距離があるために目の色までは分らない。

六人の中では年長らしいアメリカンは中年層の割には体に弛みも見えず、他の面子も肉体派らしいが負けず劣らずな体軀をしているように見える。雰囲気からアメリカン社長さんって感じた。やり手だな？ と思わせるといふか。

他の連中を伺う前にヨーロッパアンが静かに声を掛けてきたのだが、やはり何を言っているのか分からない。

これでは食事を分けて欲しくても訴えることができない。と、そこで私は閃いた。

「あつ！」

筆談ならぬ、絵談ならばいけるのではないかと、慌しく背負っていた鞆を肩から外そうと一瞬彼らから視線を外してしまった。

その瞬間、あたかもホームで新幹線の通過を見送ったかのように風が目の前を吹き抜けていった。横からではなく上から下にであったが。

何事かと顔を上げると、三メートルほど離れていた中近東風の男が一メートルも満たない至近距離にいた。

そんな私達の間を遮っているのはワイバーンの太い茶色の尻尾。逆向きに寝ていた棘が今は威嚇するかのようになっている。

マールに渦巻いていた黒の模様が尻尾の後半を真っ黒に染めていた。

なるほど、今の風はこの尻尾が振り下ろされたからか。とぼんやり納得する。

しかし、達磨さんが転んだのもりか？ いきなり、ナンなのだ？ と彼の表情を伺うためにゆっくりと視線を上げてみれば、彼は片手を振り上げたまま固まっている。

その振り上げた手に持っているのは月光を受けて輝く剣であり、先ほどの争いでついたのか刀身には赤い雫と脂の汚れが薄くこびりついているのが見えた。

ソレ、振り下ろしたら私の脳天に直撃しまいか？

ズンツと銅が^{あか}が一步前に踏み出た振動で我に返った私は慌てふためき黒の元へと駆け出す。

何か背後で言っているが言葉分らないしそれどこではない。殺されようとしたのだ。

聞く耳なんぞ持つ場合ではない。が、いかんせん戦争も知らない平和な現代っ子、スラムなんて荒廃地域も無い日本人に殺傷事件なんて交通事故に合うであろうという認識よりも低いのだ。

はつきり言えば、てんばっていたの一言である。極限の恐慌状態で黒の背に戻ろうとした。

今の私に取っては唯一の安全地帯なのだ。

だが、つるつるの鱗に指を掛けても虚しく滑るばかりで、下手に爪を掛ければ確実に剥がれそうである。手は震え、歯の根が合わない

い。ヒールが低いとは言えパンプスは鱗で滑るし、足を開こうにもタイトなスカートでは限りがある。傍から見ていればさぞかし滑稽な姿を披露したことだろう。

ズンツ、ズンツと響く銅あかのと思われる足音と怒声、金属のかち合う音も聞こえるが私は自分のことだけで精一杯である。

そんな中、一際鋭い怒声が響いた。場を鎮めるための一喝というだろうか。思わず肩越しに背後を振り返るほどの覇気だ。

人の合間を我が物顔で練り歩く銅相手あかに剣で追い払おうとする連中、そして私に剣を向けた男の後頭部を掴んで土下座を強いらせ、自分も地面に膝をついているヨーロピアンな男が見えた。

ヨーロピアンが必死な形相で何か訴えていた。

余りにも必死なその表情に、迷いが生じて絆されそうになる。

怖いのだが、一応話を聞くべきだろうか。

それとも剣で追い払おうと必死な人間相手へ、妙にやる気を見せている銅あかを留めるべきであろうか。

取り合えず足音がうるさいので、銅あかの四股まがいな足踏みは止めさせることにした。

07 私、美人も見ただけなら好きなんです。

銅をなんとか大人しくさせ、ふと気付けば白人風がもう一人増えていた。

どこから湧いて出てきたのか、ヨーロッパよりも更に透き通るような肌の白さと、アメリカン並にゴージャスな金髪をした美人である。

奥に馬車があるから、あそこから出てきたのだろうか。お嬢様が、一七〇センチは超えてそうな美人は私から見れば長身なのだが、他の六人は更に上背も厚みも横幅もあるから美人さんの華奢さが際立っている。か弱そうで儂げな感じた。

パリコレなんかに出そうなモデルスタイルだし、キリリと形良く描かれた眉にアーモンド型の目はちよつと眦が上がってて気が強そうだ。通った鼻筋、程好い薄さの唇とまさにこれぞ黄金比といった顔立ちが凡人である私には眩しすぎるっ。

イケメンといい美人といい、画面の向こう側にいるからこそ楽しめるのに、至近距離にいられるとはしゃげないではないか。

まったく、イケメンも美人も目の前で見えるモンではない。

そんな眩しい美人さんとはいささか距離があり、目の色までは分からないがこちらを見ているのは分かる。

あれ？ と一瞬不思議に思ったのだが、闇の中なので確かめようがない。

些細な違和感を覚えて美人さんよりも近い場所にいるヨーロッパ人の顔を見る。次いで美人さんの隣にいるアメリカンを見る。再度、美人さんを見る。

なるほど。距離があるのに眉がくつきりしてるとか目がきりつとしているとか、何で分かったのかが分かった。

同じ白人風なヨーロッパ人やアメリカンに比べて目と眉が濃いからだ。しかし、口紅はしていないようである。

化粧があるのか、と感心してしまった。というのも、他の六人はロビンフッドのエキストラでもしてるのかといった装いなのである。目の前のヨーロッパ人とアメリカン、美人さんはフード付きの足首まであるクロークを着ている。皮でできたクロークの厚さは薄く、^{なめし}鞣しているのか着古しているのか汚れが酷くかなりみすばらしい。

他の連中もみすばらしさは同様で、獵師が着ているような毛皮っぱいチュニツクに厚手の長袖シャツ、前腕には皮の籠手が巻かれ、薄汚れた皮のケープを纏っていた。

白人風三人以外は剣を持っているのでクロークだと邪魔なのだろうと見当をつける。

パツと見、時代錯誤も良いところなので化粧があるとは思いつかなかったのだ。

ヨーロッパ人と私を斬ろうとした中近東風の男を除き、美人さんを中心にアメリカンと他の男どもが私を伺いながら何か話し合っている。

美人さんの言葉にアメリカンが動揺し諫めてるっぽく、集まっている三人の男もアメリカンに同調しているようだ。

中近東風の男も振り返って声を上げたが、美人さんの諭すようなやんわりとした返事に押し黙ってしまう。

先ほどの一喝の声と美人さんの声が同じに聞こえる。見かけに寄らず案外声が低い。渋い美人だ。

一人静かに私を見ていたヨーロッパ人が視線を逸らさずに何か話しかけてきた。と思つてキョドっていたら美人さんが答えていた。

私ではなく美人さんに話しかけてたようだ。

視線を合わせたままだから、私に話しかけたのかと思つたではないか。

というか、視線を逸らさないヨーロッパ人は、私の挙動を見逃さないようにということか。

自分も目が離せないのとお互い様ではあるが、自分を棚上げしていささか不快に思う。

そんな風に思っている私をよそに美人さん達はまだ何かごそそと話し合う中、ヨーロッパアンが再び静かに何かを喋りだした。

今度は私に話しかけたようである。

害意はないですよとアピールするように柔らかな笑顔を浮かべつつ、クロークの内側から何かをゆつくりと取り出した。

海外の路地裏で、拳銃を持つ強盗と出会ったときに懷から財布を取り出すようなゆつくり具合である。

なるほど、と漠然とではあるが理解した。

先ほど中近東風の男が切りかかってきたのは正体不明の私が突然動き出したからとつさに防衛しようとしたようだ。

慌てふためいた日本人が素早く懷から財布を取り出そうとし、拳銃を取り出すと思った強盗が撃ってしまったという話を聞いた覚えがある。

それと似たような気がしてきた。

私も鞆を下ろすときはヨーロッパアンのように静かにゆつくりと、相手を脅えさせないように動かなければならなかったのだ。

私は私が無害であると認識しているが、彼らが認識しているわけではないのだから警戒するのは当然だったのである。

ましてや背後にワイバーンを三頭も従えているように見えるのだから、私も迂闊だったのだ。

とはいえ、ゆつくりとだが歩み寄ろうとするヨーロッパアンが怖くないわけもなく、当然私は背後の黒に擦り寄って警戒をする。

ヨーロッパアンはちよつと困ったような笑みを浮かべ、もう数歩近寄り地面に取り出した何かを置いて元の場所まで下がる。いや、中近東風の男も引っ張って美人さんのところまで下がっていつてしまった。

地面に置かれたのは銀の腕輪であった。

怪訝に思いつつ、腕輪とヨーロッパアンを交互に見やっていると、ヨーロッパアンがどうぞどうぞと勧めるように掌を揺らしている。

返事を期待したわけではないが、思わず縋れる黒を見上げると頬

擦りをしてきた。違う。そういう意味で見たわけではない。とつさに黒の鼻面を押し返し、おそろおそろ置かれた腕輪を取りにいき、ダッシュで黒の傍へと戻った。

再度ヨーロピアンを見れば、今度は右手の指で作った輪を左手首に通す仕草をしている。

この腕輪を嵌めるといのか。窄めた指先を輪に通す仕草をして見せると、疑って腹を探るのも馬鹿らしく思えるような笑顔で何度も頷いている。

人の良さそうな顔立ちとは色々と思いつつ手にした腕輪を見下ろす。

硫化したシルバーのごとく黒ずんだ金属に、形の歪んだ一センチ大の赤いガラス玉が埋められた飾り気のない腕輪である。

シルバーというより、この黒み具合は鉛のように見えるのだが。

釣りの仕掛けに使う、噛み潰し錘と似た質感と色合いである。

鉛ほど重くないのだが、長時間身につけていて害にならないだろうか？ 鉛ではなさそうだから大丈夫か？

赤いガラス玉もルビーといった宝石ではなく、透明度の高い本当に玩具のようなガラス玉だ。

ヨーロピアンを始め、全員が固唾を飲んで私を見つめている。無駄にプレッシャーを感じる。

仕方がないので恐々と腕輪を嵌めてみた。少し、というよりかなり大きく、指を広げていないとすっぱり抜け落ちそうなほど大きいで？ と思ったら、音もなく縮まって手首にフィットした！ 何コレ怖いっ！ ちよっ！ 騙したのか、ヨーロピアン！！

慌てて抜き取ろうと焦っていると、赤いガラス玉の中から、穴から這い上がるかのようによいこらせと煙より濃い物体が出てきた！ ひいいいっ！ …………… って、ヤモリだ。二ホンヤモリ！ ちっさい羽の生えたヤモリが出てきた！

ボディは透けているけど煙より重そうな、濃いエクトプラズミみたいな感じである。

月光を受けてところどころ虹色に反射するのは光学迷彩か。君は素子か。

エクトプラズムなヤモリは円らな瞳を私に向けてジッと見つめてくる。

あらやだ、何コレ可愛い。

自分からは近寄れないが別に爬虫類とて嫌いではないのだ。できることなら動物類を愛でたいと思っているのである。この嫌な特技がなければ。

ほんの数秒のことだが見つめ合ったヤモリはペロツと細い舌を出す。と次の瞬間にはガラス玉からスルスルと出てきて、怪しい鉛の腕輪を一周しガラス玉の中へ戻っていつてしまった。

何がしたかったのだ。途方に暮れる。というか、コレ外れないのだろうか。

手首に隙間無く嵌っているので爪を差し込む隙間しかない。

とてもではないが手の太い部分を通す余裕もなく、手首を切るか腕輪を切るかの選択しか考えられない。

ちくしょう、ヨーロッパアンめっ！ 苦笑浮かべるヨーロッパアンを睨みながら無理矢理腕輪を回していると、ピシッと小さな亀裂音がした。

待て。そんな強い力で回していないではないか。金属としての誇りはどこへいった！！

焦る気持ちとは裏腹に小さな亀裂音は更に続き、腕輪には蜘蛛の巣のようなヒビが走る。

そして、アッと思う間もなくボロボロとこぼれ落ちて無くなってしまった。

いったい、なんなんだっ？！

擦りながら手首の様子を伺ってみれば、先ほどの羽付きヤモリと酷似した白い刺青が入ってるのだから！

玉の肌は何すんだーっ！ あ……刺青の舌がペロツと出た。

刺青なのに、なんかヤモリが動いてるのだから？

ガラス玉から出たときは色のなかった円らかな瞳が、今はガラス玉と同じ透き通った赤い瞳になっている。遠くから見たら、赤い黒子？

「……私の言葉が通じますか？」

呆然と口を開けたままであった私に、柔らかな声が問いかけてきた。

ハッ！ と顔をあげるとヨーロッパピアノが再度声をかけてくる。

「言葉、分かりますか？」

日本語だ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9924x/>

WyvernCourier

2011年11月10日23時58分発行